令和６年度　第２回　信州幼児教育支援センター運営会議

学びの改革支援課

１　日　　時

令和６年 10 月 24 日（木）　10:00～12:00

２　開催方法

オンライン開催

３　参 加 者

【長野県立大学】こども学科長　太田　光洋（信州幼児教育支援センター長）

【長野県保育連盟】会長　海野　暁光

【長野県私立幼稚園・認定こども園協会】理事長　西片　紀美子

【長野県野外保育連盟】理事長　内田　幸一

	こども・家庭課	担当係長	羽生田　崇司
		自然保育普及推進員	藤田　良子
	県民の学び支援課	幼児教育支援専門員	久保田　学
【長野県教育委員会】	教育次長		曽根原　好彦
	教育政策課	主事	倉澤　萌
	学びの改革支援課	課長	臼井　学
		主任指導主事	田中　誠
		指導主事	小川　浩貴
		幼児教育コーディネーター	橋爪　典子

４　内　　容

（１）挨拶：曽根原教育次長

・幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っており、幼稚園教育要領や保育所保育指針等に基づき、各園の創意工夫を生かした質の高い教育の実践が求められている。

・当センターの目的は、園種を超えてオール長野で幼児教育の現場を支え、幼児教育の質の向上を図ることにある。

・今年度は、フィールド研修に現地参集の公開保育公開授業を復活させ、実践園と受講園がともに子供の事実から考えよう機会を設けたり、ミドルリーダー研修を本格実施する中で、研修の企画立案やより質の高い環境の構成について学び合ったりするなど、県内全ての園に向けて幼児教育の質の向上に寄与できるように取り組んだところ。

・信州学び円卓会議が知事部局に設置され、阿部知事と武田教育長がオブザーバーとして参加し、議論を踏まえ、「学びの新しい当たり前をともに作る」というメッセージが発せられた。子供たちが学校等でやりたいことを支える教員が、学校等でチャレンジしたいことを支えるというコンセプトのもと、来年度ウェルビーイング実践校「TOCO-TON（トコトン)」を設置予定。例えば、信州やまほいくと小学校をつなぐ等、幼児教育と小学校以降の教育をつなぐような実践校の募集もなされるような見込み。

・幼児教育で育まれた資質能力を、小学校教育を通じてさらに伸長していくために、県と小学校の職員が両者の教育について理解を深めていくことが大切であると思料。円滑な園小接続が実現できるようこれからも努めてまいる所存。

（２）協議

①令和６年度信州幼児教育支援センター活動状況について

【田中主任指導主事】

・遊びを中心とした保育の充実について、フィールド研修の実施報告

【太田センター長】

・フィールド研修の報告について、質問等。

【内田理事長】

・保育実践の言語化について。言語化は大事な部分だ。継続的に進めていただきたい。

・参集にして人数が減ったということだが、参集の場合の受入れ体制に関しては各園の事

情がそれぞれあると思う。人数が減ったということはあまり気にしなくてよいのではないか。

・参集の場合、実践園がどのくらいの規模を受け入れられるのかということを鑑みながらやられていく。それでよいのではないかと思う。公開保育の場合、あまりに参観者が多いと子供たちにいろいろと影響を与えると思う。あまり人数にこだわらなくていいのではないか。

【西片理事長】

・フィールド研修は、オンラインと参集と両方していただくことが学びが深くなると考える。参集型にすると、遊びのプロセスが明確に自分の目の前で繰り広げられ、見ている先生たちにも実感できる。そのプロセスを踏まえ、では自園ではどういうふうにしようかという思考が働く。かつて当園で行った時は３回とも参集型だった。オンラインと両方開催することで広がりと深まりと両方ねらえる。両方とも必要だと感じている。

・参加人数については、こだわらなくていいと私は思っている。参加された先生が園内研修にどう結びつけるかというところは大きな課題になってくるのではないか。「見てきた→これやっていた→じゃあドキュメンテーション作ってみよう」ではなく、「ドキュメンテーション作るには子供理解が大事だ→子供がその手に何を持っているのかな。そこに注視しよう」という視点を、先生たちがもてるということが一番大きな成果ではないかと思う。参集型に参加する先生方からどのように広がるかというところが大事であると思っている。

【海野会長】

・オンラインと参集については、実施園が選べてもいいかなと思う。その上で全部オンラインの方が参加しやすいということもある。何がいいか正解はないかと思うが、いろいろやってみる必要がある。

・リピーターがあまり増えてないような気がしている。「ここに参加してよかったから、来年はあなたが行ってみたらどうか」という意識が生じているのか。同様にデータ化と分析が必要だと思う。

・満足度について。保育者や学校の教員はお互い褒め合い、否定をしない文化だなと思っている。数値のまま受け止めるわけにはいかない。ただ満足度 98%の幼稚園があるので、取組を参考にしたい。

・実践園は手上げ方式で決まるが、本当に素晴らしい保育を行っているのかというのは全然見えてこない。質の見える化をしていくのかというのは大きなことだ。質の見える化をもう少し図っていかないとなかなか前に進まないなと思う。

・小学校の先生が保育園や幼稚園に行かれるが、そこの園で大丈夫かなというところによく行っている。熱量は、だいたいこういうのは繰り返していくと下がっていくものではある。熱量をどう上げていくのか、キープしていくのかということを我々も考えていかなければいけないと思う。

【太田センター長】

・信学会長野幼稚園は２回とも参集しているが、ここでは柔軟に考えることも重要だと思う。このように進めていければと考えている。

・次に、リピーターの件については、同じ参加園から新たにメンバーが入れ替わって参加している状況について、どのように進めていくかを考えたい。データを収集し、確認を進めることも必要だ。

・さらに、質の向上についてだが、現在は手上げ方式を採用している。しかし、手が上がらないことが多く、センターからの声がけが求められることもある。これまでの取り組みを参考にしながら、よりよい方法を検討していければよい。

【田中主任指導主事】

・リピーターについては、確かなデータをもつことが重要だ。ただ、思いつくのは、実践に参加した先生方が非常によい成果を上げたことだ。そのため、来年も受講者を送り込む形が多く見られると思う。実践園として参加した先生が次の年にどうなるかも、改めて確認してみたい。

・また、実践された先生方とその後も関わりを持ちながら進めているところもあるので、質の担保を大切にしていければと思う。

【田中主任指導主事】

・園小接続の充実について報告。

【海野会長】

・園小接続について、全国的に進展が見られないのが現状のようだ。笛吹けど踊らずという状況が何年も続いているが、構造的な問題もあるのだろう。小学校側の関心が薄いというのは全国共通の課題であり、その点についても検討が必要だと感じている。

・特に校長先生があまり興味を持っていない、または理解が進んでいないのも原因の一つだと思う。一方で、学校が大きく変わりつつある中で、教員側がその変化を理解できていないこともある。自身が受けた教育をそのままイメージして、小学校の教育を考えているのではないだろうか。

・まずは校長先生へのアプローチをどうするかが重要だ。校長先生に園の取り組みを知っていただきたいと思っているので、そんな機会があるといい。最新の保育や授業の形を知ってもらうことが必要だと考えている。また、子供を中心に置いて考えることも大切だ。

・保護者がその理解をもっていない場合、宿題を出してもらえないなどの問題もある。学びが変わってきていることを保護者も理解していないため、それぞれ異なる考えをもちながら同じ方向を目指しているため、うまくいかないのではないかと思う。

・以前、奈須先生と伏木先生の講演を教育委員会で拝見したが、とても興味深かった。私たちも参観日や保護者会で、授業がどう変わっていくのかを説明している。そのためには地道な取組が必要だと感じている。

・保育者側の学校理解はまだまだ弱いと感じる。校長先生に保育について知ってもらうことは重要で、来年度への展望にもそれを入れたいと思っている。文科省も接続に力を入れているが、学びの連続性や幼児期と小学校以降の学び方が変わっていくという視点がまだ弱いのではないか。

【内田理事長】

・学校同士の接触や交流がなかなか確保できていないのが現状だ。私たちの園でも全ての小学校と交流できているわけではないが、いくつかの学校とは連携ができており、そのおかげで校長先生の理解も進んでいる。こちらの子供たちがどのように育ってきたのかをリアルに伝えることができるので、そうした関係では比較的よいつながりができている。

・しかし、やはりお互いの交流が少ないために大きなギャップが生じているのが現実だ。今回の参加状況を見ても、小学校側からの参加が積極的でないことが残念だ。幼児教育と学齢期の接続に関しては、育ちの様子が異なるのは確かだが、どのようなアプローチで幼児期の子供たちが過ごしてきたのか、保育者がどう働きかけてきたのかが十分に伝わっていないと思う。

・小学校に上がる段階でさまざまなつまずきがあり、子供たちがスムーズに小学校の生活に移行できないことが増えているのが現実だ。私のところでもその傾向が見られる。幼児期にしっかりと育ちを促進することが、子供たちが小学校に入ったときによい影響を与えると思う。

・私たちが目指している育ちの姿や、幼児期をどう卒業させていくかを考える必要がある。いわゆる学齢期に入った際に、次の学びにどのように結びつくかを考えなければならない。幼児教育の側もしっかりとその点を考えていかないと、学校側とのつながりはうまくいかないと思う。

・学校側に任せるだけでは難しいので、私たちが育ちをきちんと保障することが、幼少接続の基本的な考え方だと感じる。そのために、接続のための研究会や研修会を根気よく継続していく必要があると考えている。県側がいろいろな企画をしてくださるのは非常にありがたいと思っている。

【太田センター長】

・こうした接続研修で、先生方の感想に「園の先生たちは小学校の先生と話せてよかった」という意見がよく出てくる。園の方では、今までは園でこのようにやっていたのに、小学校に行ったらそれが生かされていないという不満も見受けられる。園側からすると、小学校の方に問題があるという捉え方もあったと思う。

・しかし、内田先生が言われたように、幼児期までにどのような育ちを保証していくかをしっかり考える必要がある。園の方でも保育の見直しが必要な部分があると感じる。こうした視点を持つことが重要だと思う。

【西片理事長】

・来年度への展望について、小学校の低学年の教員を対象にした接続の視点での授業づくりは非常に重要だと思う。校長先生レベルでの理解はもちろん必要だが、実際に現場を動かす先生がどのように考え、子供を見守るかが大切な要素だ。

・現在、小学校では学級担任一人で授業を展開していることが多い。そのため、現場を何度か見させてもらった中で感じるのは、接続を考えながら子供の育ちを大事にし、子供の言葉をしっかり聞いている先生のクラスでは、子供たちが生き生きとしているということだ。一方で、教育課程に沿って「ここまで国語を教えなければ」「算数を教えなければ」といった従来の枠組みに縛られていると、どんなに素晴らしい資質を持った先生でも、子供たちの思いや学びを拾いきれない現実がある。

・そのため、生活科の授業の中で「子供の思いを聞こう」「この子はどんな気持ちでいるのか考えよう」という視点をもつことは、非常に重要な第一歩だと考えている。

・小学校の先生が関心を持てない、あるいは研修に参加できないという現状には、校長の影響が大きいと感じている。また、担当の先生たちと話をする際には、教材や保育内容、教育内容を軸にして話を進めると、その繋がりが見えやすくなると思う。そうした流れができつつあるのではないかと感じている。

・生活科についての話を聞くと、教材キットを使って授業を進めることが多いようだ。そうなると、個々の子供の興味や関心に応じた柔軟な教育が難しくなる一面がある。この状況を踏まえて、授業作りの研修を通じて、特に生活科に関心を持って取り組んでいる先生からの広がりを期待できるのではないか。そういう試みを大切にしていきたい。

【田中主任指導主事】

・自立して学び続ける保育者の育成について報告。

【海野会長】

・これは本当に個人的な感想だが、キャリアステージが年功序列を前提にしているのではないかと思っている。一般的には、ベテランが前面に出て、若手がその後ろをついていくような組織形態が多い。そうした研修もその延長線上にあるのではないかと感じている。

・当園では、若手が前面に出て、中堅がその後ろ、ベテランがさらに後ろという形態にしている。これを数年続けているが、若いスタッフは新しいことにチャレンジする意欲が高く、いろいろなことを試みてくれる。ただ、危なっかしい面もあるため、中堅が後ろで支え、ベテランが全体をフォローする体制にしている。こうすると、変化に対応しやすくなる。

・ベテランが前面にいると、どうしても変化に対応できなくなり、新しいことにチャレンジしない傾向が強まる。そうした組織形態があるため、もう少し柔軟な考え方が必要ではないかと常々考えている。ただ、これはあくまで個人的な意見である。

【太田センター長】

・海野先生の考え方は非常に面白いと思う。キャリアステージについては、基本的に経験年数を想定しながら組み立てているが、得意分野やその時々の力に応じて対応させている部分もある。ただ、経験年数に関わらず新しいことにチャレンジしていくという視点は、これとはまた別のアプローチでの研修が必要なのではないかと感じた。

【内田理事長】

・海野先生の考え方は非常に面白いと思った。今、太田先生がおっしゃったように、新しいことにチャレンジしたり、創造的な保育を作ったりしていくことは、世代を問わず必要だと感じる。年齢や経験に関わらず、急速に変化する社会に適応し、子供たちが新しいテクノロジーや環境とどう接していくのか、また旧来の保育で大切にされていたことを再評価することが求められていると思う。

・各キャリアステージで持っている情報や感覚が異なるため、それを逆に生かすことが大切だと考えている。年功序列や経験年数に縛られるのではなく、それぞれが持つ力を現場に発揮できる雰囲気を作ることが重要だ。保育の現場では、経験が豊富な人も少ない人も、自分の持っているものを提供し、新しい保育を創造するための意識を持ってもらいたい。

・管理職にも、このような意識をもってもらい、全世代の人たちにアイデアを提供してもらうことが必要だ。研修の中で不適切な保育が話題になったが、新しい保育を実践することで、そうした問題をなくしていけると信じている。園内でのコミュニケーションがしっかりと取れていれば、スタッフが孤立せず、お互いを支え合う環境が整うはずだ。これにより、追い詰められることなく、よりよい保育を目指せると思っている。こうした視点をもつことが、今後の保育現場にとって重要であると考えている。

【太田センター長】

・それぞれの先生が経験年数にとらわれずに力を発揮できるようにするためには、どのような影響を受けられるかが大きな課題だと思う。不適切な保育についての話もあったが、やはり子供にとってよい保育が何かを考えることが重要だと感じる。

・「不適切」という視点から考えるのではなく、まずは「子供にとってよいものは何か」という方向で考えることができれば、よりよい保育が築かれていくのではないかと思う。こうした視点をもつことが、保育の質を高めるために必要だと感じている。

【西片理事長】

・ミドルリーダーの研修には大体何人くらいが参加されているか。

【田中主任指導主事】

・今年度は 15 名の先生にご参加をいただいている。いずれもご推薦をいただいた先生方だ。

【西片理事長】

・当協会も出て行って勉強してほしいと思って推薦させていただくが、初めは「私が」という反応が多い。しかし、行って帰ってくると「先生、すごくよかった」と、その立場の研修を前向きに捉える姿や声が聞かれたことが非常に嬉しかった。

・次に、チーム力についても話題になっているが、幼稚園や保育園の中でのチーム力は非常に大切だと感じる。昔のように全てを一人の先生がやる時代ではなく、それぞれの得意なところを生かしながら子供に向き合っていくことが重要だ。もし可能であれば、誰がその役割を担うかは問題だが、ベテランの先生も若い先生もミドルの先生もそれぞれの良さを認め合い、協力し合っていくことが大切だ。

・私はコーナー保育を多く取り入れているので、その観点から言うが、そうした保育が本当に重要だと考えている。一人の力に頼らず、得意分野を生かした保育がこれから求められていくと感じている。

・個人的な感想だが、チーム力の充実は大切であり、それをどうやって作り上げ、マネジメントしていくかという点は難しさも伴うと思う。そのような点でも充実していければいいなと思っている。

【田中主任指導主事】

・その他の事業についての活動報告。

【太田センター長】

・ドキュメンテーションの研修についてどうか。

【内田理事長】

・私が担当したのは応用編で、まず最初に写真のことに触れたい。写真がもっている心理的な効果について考えると、ドキュメンテーションを作る際に撮影される先生たちが活動の様子を記録していることが多い。その中で、せっかくドキュメンテーションを作る際には、後で文章で補足がされるが、子供の心理状態や参加する気持ちなどが文章として書かれることがよくある。

・ただ、保育者の思いや子供の気持ちの動きが文章で表現される一方で、それを写真でも表現できないかということを考えた。子供の内面的な気持ちが表情に出るような写真をどうやって撮るか、これが写真の入り口でお話しした内容だ。

・また、ドキュメンテーションについても、いろんな人が関わってどのようなものが作られているのかに、皆さんが興味をもっているようだ。今後の応用編では、さまざまなタイプのドキュメンテーションを実際に見られるような研修にしていくとよい。

・自分が作っているものが本当によいのか、各先生が抱える不安は大きいと思う。いろいろな事例を参考にしながら作りたいという気持ちをもっている方が多いのではないかと感じている。そんなことで、できるところはお手伝いしたいと思っているので、今後ともよろしくお願いいたします。

【太田センター長】

・実践発表者というのはどのように決めているのか？

【田中主任指導主事】

・今年度については、我々が参加をした、訪問をしたなどで縁をいただいた実践者。先生方の縁で、実践者を紹介していただけたりするとそれはありがたい。

【太田センター長】

・ミドルリーダー研修でもドキュメンテーションの制作を行うが、それも発表してもらえればいいと思う。ドキュメンテーションにまとめた一つの事例というのも参考になるのではないか。

【西片理事長】

・ドキュメンテーションについて、当園でも取り組んでいる。やはり、伝える相手や共有したい相手によって作り方が異なることがある。いろいろな作り方があっていいし、いろいろな見え方があることも大切だと最近思っている。

・例えば、保護者と共有したい時には、模造紙を使っている。小さい単位での記録を職員同士で共有したい時は、パソコンを使ってシェアする形になっている。ドキュメンテーションは本当にいろいろなやり方があり、正解はないが、やはり子供の内面を知ることが根底にあり、子供理解の上に成り立つドキュメンテーションが重要だと考えている。

【海野会長】

・いろんなところでドキュメンテーションの活用状況を伺うと、多くは月に１回できればいいという感じで、毎日行われているわけではないのが現状のようだ。月１回作るとなると、全ての子供がちゃんと写っていなければならないというプレッシャーから、無駄なところに労力を使っている印象がある。

・また、ドキュメンテーションが目的化してきて、これをやれば質の高い保育だという風潮も見受けられる。そもそも、保育が楽しくなければ、ドキュメンテーションを作っても苦痛なだけだ。保育が楽しく、ワクワクするからこそ、伝えたいという気持ちが生まれる。その伝え方は口頭でもドキュメンテーションでも写真でも構わない。

・この考え方が根底にないといけないと思う。本当は先に保育を楽しくしないといけないが、現状はドキュメンテーションが先になってしまっているのが実情だと感じている。

【太田センター長】

・幼児教育アドバイザー連絡協議会についてはどうか。

【海野会長】

・市町村によって温度差がかなり出てくるだろうと感じている。熱心に参加している地域とそうでない地域の差が出てくることが少し心配だ。

【太田センター長】

・保育専門相談員との連携の話が出た。協力してという風にできるところがあれば。情報共有からでもスタートできればなという風に思う。これは継続してアドバイザーをされている方々が、新しい情報を常にもちながら、方向性を共有することが非常に大切だと思う。先ほどの市町村による格差を、できるだけ多くの方々に参加していただける形で無くしていきたいと考えているので、また後押しをいろいろしていただければと思う。

・ミドルリーダー研修についてはいかがか。内容が充実していると思う。先に西片先生が言われたように、参加してみるとよい感想やお話がいただけるのではないかと思う。

【西片理事長】

・先ほどお話を聞いたところ、やはり皆さんにとってミドルリーダーの研修会という言葉がまだ知られていないことが一番のネックのようだ。そこで、当協会としてこうした素晴らしい研修会があることを発信していきたいと考えている。もっと皆さんに知名度を上げていければいいのではないかと思う。ありがとうございます。

・継続して同じメンバーで取り組む研修はなかなかないと思うので、ぜひ先生方にも共有していただけると助かる。

【海野会長】

・当園が去年、一人参加させていただいたが、とても学びが多かったようで、園の取り組みの立ち位置が見えたみたいだ。いいところも、こんなところが特徴なんだなということで、今本当にミドルリーダーとして３、４、５歳のクラスは実質彼女が引っ張っているような状況で、とてもよかった。やはり西方先生が言われたように、もっと PR していければなと思っている。

【太田センター長】

・人数的にはどうか。参加者の人数っていうところでは何か感じるところがあるか。

【田中主任指導主事】

・もっと多くても全然できるなというのが正直なところで、15 人という割とこじまりしたメンバーだからこその良さもあるかもしれない。しかし、全市町村から一人ずつ推薦していただければ、団体様も合わせて 88 名を想定しているので、マックス 88 名でも十分いけると思っている。

・フィールド研修にも分散して、20 名ぐらいずつ行くこともできる。また、研修会場も広いところで確保できるし、オンラインでの分科会にすれば 100 名ぐらいまで対応できる。マックスを目指して周知を進めていきたい。もっと多くてもできる。

【内田理事長】

・感想だが、本当に内容はかなり充実しているので、参加者が少ないのはちょっともったいないと感じている。やはり周知を進めながら参加者を増やしていく必要があるし、園の中でもどの園からも一人ずつは参加してほしいと思っている。その辺のところを進めていただければと思っている。

【太田センター長】

・続いて学びの改革フォーラムながのについて。これはいかがか。

・初めての試みになる。フィールド研修に取り組んでいただいた園の皆さんには、ここで発表をしてもらうということになる。選べるプログラムは２部で行われ、同時並行で各ブースで進めていく形になる。

【田中主任指導主事】

・学校と園がうまく分かれて、それぞれの興味に応じたブースに行っていただくイメージだ。この選べるプログラムについては、事前に選択する形になるのか、当日資料で示す予定だが、今のところは当日選んでいただくことになる。申し込みの段階ではなく、当日に選択してもらう形になる。

【海野会長】

・選べるプログラムの中の新たな学び常設ブースでは、エドテックやメタバースなど、さまざまなテーマが取り上げられる。

【田中主任指導主事】

・具体的には、実演形式になるのか、業者が来て何かを行うのかについては、まだ詳細が詰められていない状態だ。できれば実演もできればいいなと考えている。

【海野会長】

・ビッグサイトや教育関連のイベントのような形で行われることを想定しており、曽根原次長が講演でお話しされた内容も参考にできればと思っている。楽しみにしているので、今後の展開を待ちたい。

【太田センター長】

・保育関係者の参加の見込みはどうか。

【田中主任指導主事】

・今のところ、通常の発出周知の仕方で進めていこうと考えている。ただ、「学びの改革ミニフォーラム」はこれまで第３回を開催し、今度第４回があるが、回を重ねるごとに園の関係者が増えているのが嬉しい。ミニフォーラムに参加された先生が、本フォーラムにも興味をもっていただければありがたいと思っている。

・ただ、今回は参集ということもあり、その辺りのハードルが少し高いかなとも感じている。今後の参加者の増加を期待しつつ、周知を進めていきたい。

【太田センター長】

・発表される先生方もたくさん来てもらった方がいいだろうなと思う。声掛けも工夫できるところがあればしていただいきたい。

・総合教育センターの幼児教育関係講座の実施状況報告についてはいかがか。ここで 14 名参加者のうち保育者８名だが、保育園と幼稚園内訳はどうか。（確認が取れていないとの回答。）何年か継続して行っている。そんなに参加者が多いというわけではないが、継続していきたい。

・情報誌の発行についてはどうか。

【田中主任指導主事】

・今年度も「おさなご」「すこやか」に寄稿している。１回目は７月号で、次は 11 月に寄稿予定だ。小川指導主事が執筆してくれているので、ぜひ手に取って読んでいただきたい。年３回発行しているが、情報発信の方法について見直しが必要かもしれないと考えている。この点については、後ほどまたお話しできればと思う。

②来年度の事業計画について

【田中主任指導主事】

・重点施策の報告

【海野会長】

・園小接続に関して、従来の流れをそのまま踏襲している印象がある。最近、北海道の安平町の取組が面白いと聞いた。あちらでは、年長の担任が小学校１年生の補助員として半年間活動し、後半は再び幼稚園に戻ってフィードバックを行うという形をとっている。この取組は非常に参考になると思った。

・安平町は、トマトなどの特産品で有名なので、予算的に余裕があるのかもしれないが、先駆的な試みとして注目すべきだと感じた。我々もこうした取組から学び、実践していく必要があると考えている。

・さまざまなやり方があると思う。私は子供を中心に置き、保護者ももっと接続に加えるべきだと以前から考えている。

・それから、アドバイザーに関する件だが、専門性をもった方々が集まるということで、広島の平川前教育長の話を参考にして思いついたのは、指導主事がさまざまな学校を訪れ、その後戻ってきてみんなで話し合うという取り組みだ。そこで得た結果をもって、再度各学校へ訪問し、いわゆる往還型の指導主事としての活動を行っているようだ。

・このような取組を幼児教育アドバイザーにも取り入れていくことが重要だと思う。情報共有ができる場があればよいなと思っている。それがオンラインであったり、年に１回の懇親会で意見を交わせたりする機会があれば、さらによいのではないか。

【内田理事長】

・要するに、接続の部分で学校、園、保護者の３者の共有が重要だと思う。回数は多くできないかもしれないが、年に１回程度は各学校や園と、その接続をもつ卒園生の保護者を交えた会議体を設けるのがよいのではないかと考えている。

・保護者の意識も変わらないと、接続は難しい。家庭内での状況や、学校以外の習い事や学習塾なども絡むので、いろんな立場の人たちが子供の育ちを共有することが大切だ。学校に行く場面を作らないと、各自が孤立した状態で動いている現状が続く。

・一つのアイディアとして、年に１回程度、接続の段階でそういった会議を設けることは有効だと思っている。

【西片理事長】

・今お話を伺っていて、私も以前から保護者がどう捉えているのかをとても重要だと感じている。私も一生懸命に「こういうふうに小学校も受け止めてくれるから」と説明しているが、なかなか浸透しないと感じている。

・接続という言葉一つにしても、本当に小さな村単位ではやりやすいと思うが、長野市や松本市のような大きな場所では具体的にどう進めていけばよいのかと考えている。黙って見ていても解決しないので、ぜひ皆さんで保護者を巻き込んで進めていければよい。

・園小接続に関しては、今後どんな取組ができるかを考えていく必要がある。また、今示した展望については、来年度の１回目の運営会議で詳細に検討していただくことになると思う。この形をベースに、継続していくものや新たに加えるもの、一部を改変するものなどを提案していくことになるので、よろしくお願いしたい。

③その他の議題について

【こども・家庭課　藤田】

・昨年度、文科省からのお話を伺った際、幼稚園の園長先生や理事長先生が集まる場に参加した。その中で、長野県の幼児教育支援センターの組織や推進方向が全国的にもしっかりしていると聞き、改めてそう感じた。今回、園小接続を推進できるとのことで、今日の会議でもいろいろな意見が出たが、「子供を真ん中に」という県の方針に沿った、保育園と小学校の願う子供の姿をしっかりもつことが重要だと思う。

・長野市では、幼保小連携会議が行われており、大きな市なので保育園や幼稚園、小学校が混ざって話し合っている。すべての子供が同じ小学校に行くわけではないが、連携園や連携小学校との間で「願う子供の姿」を考え、それぞれの園や学校で発表している。

・私は信州型自然保育を実践している中で、この地域の子供たちにとっての「願う姿」を指針に沿いながら、一致団結して進めることが大切だと感じている。この保育法は地域の自然を大切にしながら計画的に進めることを重視しているが、生活科の教科書が縛りになってしまうことがある。そのため、幼稚園や保育園でのよい取組が、小学校での評価や進め方に影響を与えることが多い。

・先ほど、曽根原次長からも自然保育についてお話があり、生活科や総合的な学習の時間が連携につながると思う。教科書に縛られず、子供の姿や接続に関する内容がもっと具体的に共有できればいいなと思う。小さな町村では、題材や素材を共有しやすいと思うし、そういった取り組みが進むとよいだろう。

・信州型自然保育は、10 月 1 日に認定が終わり、313 園、48 市町村に広がった。幼児教育施設は 800 以上あり、認可外も含めて、1/3 以上が新しい保育法を取り入れている。10 月 20 日には、銀座長野で「長野県で保育士をしませんか」というセミナーを行い、参加者から「自然たっぷりの環境で育ちたい」といった意見が寄せられた。また、喬木村では若い職員が中心となり、地域の林をフィールドとして子供たちの教育を考えている。役場の職員が立ち上がり、補助金を集めてフィールドを整備している。

・こうした地域の連携が進むことで、教育委員会も力を貸してくれると感じている。教育や保育の現場で様々な取り組みができるとよいと思う。

【太田センター長】

・税金の使い方が変わる中で、自然保育に活用できるような予算がつながるとよいと考えている。先駆的な取り組みをしている地域の職員にも、幼児教育支援センターの活動にぜひ関わってもらいたいと思っている。そのことについてもお話ししたい。